

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第131号 2025年11月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1

近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

| | | |
|---|--------|----|
| コラム 「温泉むすめ師範学校」は何故、師範学校なのか | 長谷川 鷹士 | 2 |
| 女子教育史散策・昭和戦時下編(80) 東京家政専門学校及び東京家政学院高等女学校の場合 I | 長本 裕子 | 8 |
| 東京経済大学に父母の会が発足される — 1983年4月に発足した大学父母の会 — | 谷本 宗生 | 14 |
| 進学案内書にみる戦前期東京の予備校(19): 『入学選定男女東京遊学案内と学校の評判』(大正7年)(3) | 吉野 剛弘 | 17 |
| 七年制高等学校における尋常科・高等科間の教育の相違: — 学校空間での中等教育から高等教育への接続について (1) 本研究の視座 | 猿田 怜央 | 20 |
| 資料から見る「教育」の歴史⑧ —「学の独立の為に昇格反対の叫び 早大学生の示威運動」 『東京日日新聞』(1919(大正8)年12月12日) — | 山本 剛 | 26 |
| 刊行要項(2015年6月15日現在) | | 28 |
| 短評・文献紹介 小金井良精の日記について(谷本)、高山羽 根子『首里の馬』について(富岡) | | 29 |
| 会員消息 長谷川鷹士、山本剛、猿田怜央、谷本宗生 長本裕子、富岡勝、 | | 30 |

コラム

「温泉むすめ師範学校」は

何故、師範学校なのか

はせがわ ようじ
長谷川 鷹士(上越教育大学)

X(旧twitter)で自身の研究対象である「師範学校」についてどのようなポスト(旧ツイート)があるのかをたまに確認している。アンパンマンの作者とその妻をモデルにした朝ドラ「あんぱん」で師範学校が取り上げられ

ていたので、同朝ドラ関連で師範学校に言及しているポストが多く見られた(1)。あとは戦後の学校制度より戦前のほうがよかったのではないかといった文脈で「師範学校復活論」を唱えるポストなどが散見される(2)。

そうした中で時に謎のポストも見られる。以下のポストである(3)

泉海「今後の師範学校についてン印ンんんんんんんんんん
mbkhjmbbjbmmbjjjmjbjjjjbjjgjjgjjjjbbjjj」

泉海「ごめんなさい、途中からキーがハマりこんで戻そうとしてるうちに送信されてしまいましたわ」

彩耶「怖かったよ!」

最初見たときは「怪文書?」となったのだが、観光庁が後援していたこともある(株)エンバウンドが主催する温泉地振興プロジェクトの(4)、非公式botのようである。

同プロジェクトは「温泉むすめは、アニメや漫画、キャラクターや声優などの様々なコンテンツを通じて、日本全国の温泉地や観光地の魅力を国内外に発信するために作られた地域活性化を主目的としたプロジェクトです」と説明されている(5)。このプロジェクトは若年女性の支援などにあたる一般社団法人Colabo代表の仁藤夢乃氏のツイートによる問題提起もあり(6)、女性に対する性的搾取ではないかと議論されたこともあるが、本稿ではこの点には主としては論及しない(後程、仁藤氏のツイートには言及する)。

さて、本稿で論及したいのは「温泉むすめ師範学校」である。温泉むすめ師範学校については公式サイトで以下のように説明されている(7)。

東京はお台場にあるスクナヒコが創設した温泉むすめ専用の学校。一般教科の他にも温泉について学ぶ温泉学がある。

また、学校指定の袴があり、通学者は着用が義務付けられている。高等部の生徒会長はSPRiNGSのリーダーでもある道後泉海が務めている。

「師範学校に生徒会長はいないだろ」は野暮なツツコミだが、以下、野暮を承知で温泉むすめ師範学校の設定を検討する。結論を先取りすれば、およそ歴史的に存在した師範学校とは似ても似つかない教育機関として温泉むすめ師範学校は設定されている。

まず温泉むすめを定義する文章中に温泉むすめ師範学校への言及があるのだが、歴史的に実在した師範学校とはだいぶ異なった教育機関になっている(8)。

スクナヒコが創設した「温泉むすめ師範学校」に通うことが多い。師範学校はお台場にあるが、神である温泉むすめたちは神社間をワープで移動できるため、どの温泉むすめも生活拠点は地元の温泉地である。

師範学校＝全寮制という認識は誤っている(時期によっては通学生を認めている)ので、温泉むすめたちが通学することは必ずしも師範学校の実態とずれているとは言い切れない。しかし、通学が許可されたのは師範学校近隣に親ないし親族が住む生徒のみであったという事例もあり(9)、なにより全寮制イメージの強い師範学校を名乗らせた理由が判然としない。

次に先述の仁藤氏のツイートで批判された「ワインを飲む中学生」という部分を検討する(10)。公式サイト「温泉むすめ伝「三朝歌蓮の章」」の中に「温泉むすめは年齢に関わらず飲酒が許可されている」という記述がある(11)。未成年飲

酒公認である。温泉むすめは人間のように見えるが神様なので未成年飲酒にはあたらないというのが公式側のエクスキューズのようである(12)。

しかし、師範学校では成年の飲酒さえ禁止されており(13)、飲酒を許可されている温泉むすめが通うのが師範学校なのはやはり解せない。

また温泉むすめ伝「志摩茉莉也の日記」にもおよそ師範学校らしくない記述がある(14)。

わたしは1年A組になりました。いきなりびっくりしたのは、早速遅刻しかけて窓から教室に飛び込んできた子がいたこと。鬼怒川日向さんという温泉むすめでした。

師範学校でこんなことをしたら、処分は免れ得ない。あるいは温泉むすめ伝「磐梯熱海萩の章」の記述(15)。

うん。さすがに三日に一回のペースで『彼氏いますか?』って聞かれちゃうとね。アイドルは恋愛NGっていう暗黙の了解があるし、それを利用させてもらおうかなって思ってたんだけど……

師範学校は恋愛厳禁である。バレたら退学という厳しい処分が下されることもあった(16)。先述した朝ドラでも描かれていたように生徒宛の手紙はすべて舎監がチェックし、異性の影が少しでも見られたら厳しい処罰が待っていた。「アイドルは恋愛NG」どころの話ではない。

あるいは温泉むすめ伝「東山季利花の章」の記述(17)。

師範学校の「見回り」はあたしが自分に課している任務の一つだ。あたしは毎朝授業が始まる2時間前に登校して、校舎や敷地内に不審者がいないか、危険物がないか見て回り、最後に学校の周囲を一周する。

特に今年は気が抜けない。多くの温泉むすめがアイドル活動を始めて、師範学校全体が浮足立っているからだ。

見回りが必要なほど、師範学校が「浮足立っている」のは想定しがたい。そもそも師範学校では起床時の寝具の整理、朝礼、授業前の学習とやるべきことが目白押しであり(18)、生徒が自発的に校内の見回りをする余裕などない。

以上、野暮を承知で「温泉むすめ師範学校」がまるで師範学校らしくないことを述べてきた。最後にそれにもかかわらずなぜ、師範学校という名称が選ばれたかを考察する。

注(7)で引用したように温泉むすめ師範学校に通学する際は指定の袴の着用が義務付けられている。袴といえば大正ロマン、大正ロマンといえば女学生という図式に乗ったのであろうことが容易に想像できる。その場合、普通は高等女学校を想起するはずである。しかし、温泉むすめは師範学校を選択している。なぜだろうか。

温泉むすめという「専門職」(?)になることを踏まえると、高等女学校では専門職養成から遠い、師範学校なら専門職養成らしさが出る。このくらいの理由で「温泉むすめ師範学校」という名称が選択されたのだらうと考える。実際には高等女学校でも小学校教員という「専門職」養成はなされていたのだが(19)、一般には認識されていないのであろう。同じく専門職養成機関として想起されるであろう陸軍士官学校では男らしすぎる。女性の通う、袴を履いている専門職養成機関＝師範学校、このくらいの認識であったのだらう。

……温泉むすめプロジェクトは様々な課題を有するが、筆者の立場からすると教育史の知見がまるで省みられていないのだらうな、という忸怩たる思いを抱かせたというのが本コラムの結論である。上述したなぜ、師範学校かはあくまで筆者の推測にすぎないので、事情を把握している方からご教示いただけると幸いである。

「温泉むすめ養成学校」くらいの表現が選ばれなかったのは何故なのだらう

か。

注

(1)たとえば友田健太郎 @Buffalo1999 2025年9月25日午後8:18(JST)のポスト【2025年12月12日閲覧】。

(2)たとえばPsycheRadio @marxindo 2023年3月26日午前9:20(JST)のツイート【2025年12月12日閲覧】。

(3)温泉むすめコピペbot @Onmusu_copybot 2025年11月18日午後3:28(JST)のポスト【2025年11月27日閲覧】。botなので度々、同様の投稿がなされている。

(4)現在、温泉むすめ公式サイトの「SUPPOTER」ページには観光庁の記載はないが(温泉むすめ公式サイト「SUPPOTER」 <https://onsen-musume.jp/supporter/> 【2025年11月27日閲覧】)、以前は観光庁の後援を受けていた(閲覧)、以前は観光庁の後援を受けていた(PR TIMES 「観光庁の正式な後援が決定! 地域活性クロスメディアプロジェクト」 2019年6月24日 <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/0000000009.000022128.html> 【2025年12月12日閲覧】)。

(5)「温泉むすめとは」温泉むすめ公式サイト <https://onsen-musume.jp/news/3711> 【2025年11月27日閲覧】。

(6)仁藤夢乃(@Colabo_yumeno)の2021年11月15日午前10時41分(JST)のツイート参照【2025年11月27日閲覧】。

(7)「WORDS 用語解説」温泉むすめ公式サイト <https://onsen-musume.jp/words/> 【2025年11月27日閲覧】。

(8)同上。

(9)今泉朝雄「<研究ノート>師範学校寄宿舎の歴史的変遷—森文政期～大正期を中心に—」『教育学雑誌』第34号、日本大学教育学会、2000年、207-208頁。

(10) 前掲、仁藤夢乃(@Colabo_yumeno)のツイート。

(11) 温泉むすめ伝「三朝歌蓮の章」2020年10月13日 <https://onsen-musume.jp/story/14714> 【2025年11月27日閲覧】。

(12) 同上。

(13) 内閣記録課『現行法令輯覧』下巻、有斐閣書房、1913年、168頁。1909年文部省訓令第12号で学校生徒の飲酒は取り締まり対象とされている。師範学校生徒に限らず、中学校生徒なども取り締まり対象であった。

(14) 温泉むすめ伝「志摩茉莉也の日記」2020年4月18日 <https://onsen-musume.jp/story/39513> 【2025年11月27日閲覧】。

(15) 温泉むすめ伝「磐梯熱海萩の章」2020年3月25日 <https://onsen-musume.jp/story/37260> 【2025年11月27日閲覧】。

(16) 下中弥三郎、為藤五郎、小原國芳、志垣寛『教壇回顧 飛礫』1923年、集成社、88-94頁。女子生徒と付き合った教員が免職になり、さらに当該生徒は退学、二人の間を取り持った生徒も退学という事例や、恋愛が露呈した生徒が、理解のある舎監長の計らいで通例退学のところを停学で済まされた事例などが紹介されている。

(17) 温泉むすめ伝「東山季利花の章」2021年5月31日 <https://onsen-musume.jp/story/97012> 【2025年11月27日閲覧】。

(18) たとえば1912年度の大阪府天王寺師範学校の場合、『大阪府天王寺師範学校一覧』によれば、校内寄宿生は起床、朝礼、掃除、朝食、授業と授業までの行事が決められていた(163-164頁)。校外寄宿生の場合も同様であり、起床、朝礼、朝食、掃除、校訓ないし精神修養書読書、登校と朝の行事は決められていた(172-173頁)。

(19) 丸山剛史・井上恵美子・釜田史・白石崇人・大谷奨・亀澤朋恵・内田徹著『近代日本小学校教員検定制度史研究—地方における試験検定・無試験検定試験制度運用と受験の実態—』学文社、2025、114頁など参照。

*** コラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。**

女子教育史散策・昭和戦時下編(80)

東京家政専門学校及び東京家政学院高等女学校の場合Ⅰ

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

はじめに

このシリーズは、『ニューズレター』第129号の「金城女子専門学校及び付属高等女学校の場合Ⅰ」の「はじめに」で述べたように、大正6年ごろから徐々に興隆を見せていた女子教育であったが、満州事変(昭和6年9月)勃発、日中戦争(昭和12年7月)、太平洋戦争(昭和16年12月)へと突入するに従って、変化せざるを得なかった学校生活について述べるものである。今号では東京家政学院について、『東京家政学院五十年史』『東京家政学院100年史』を参考に述べよう。

家政研究所開設、東京家政学院開校まで

東京家政学院は、大江(旧姓宮川)スミによって、1925(大正14)年4月、東京市麹町区三番町(現東京都千代田区三番町)において創立された。大江は、4年間のイギリス留学やヨーロッパでの視察から実践的家政学の必要性を感じた。帰国後、東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学、以下東京女高師と表記)家事科教授を務めたが、当時の家事科は講義のみで、実地の指導はなく、設備の必要性を願い出ても家事科に対する学校の態度は冷淡であった。

大江は、日本の風俗習慣、生活様式に即した家事科の体系を作ることが第一と考えた。そこで学校からの帰途、築地の精養軒や本郷の燕楽軒に通い、料理場へ入り、多数の料理人と一緒に料理の腕を鍛えた。その他西洋洗濯、洗い張り、染物、蒲焼屋、すし屋、下駄屋、洋傘屋、障子・襖^{ふすま}貼り、小包・荷造りのコツなどを、それぞれの専門店で習い、デパートに行けば新しい家財道具を探し、礼装に関するものを調べるなど、すべてを研究資料として見た。いつもエプロンとノートを持ち歩き、実技を研究し、整理して、1910(明治43)年7月『家事実習教科書』

を刊行した。また、翌年11月には、随筆『三ぼう主義』を刊行した。三ぼうとは、女房・説法・鉄砲のこと。すなわち家庭・宗教・兵備の三方面を、日本と英国とを比較検討し、日本の在り方に反省を求めたものであった。

大江は、1915（大正4）年7月、40歳の時、陸軍軍人でクリスチ안의大江玄寿と結婚。夫婦そろって日曜礼拝に通うなど、年来の大江の夢が叶った。しかし、6年足らずで、大正11年1月、夫は風邪がもとで他界した。悲しみの中で、大江は、理論と実験・実習を並行して進める教育を日本女性に施したいという思いに至った。東京女高師教授として務めながら、1923（大正12）年2月、東京市牛込区市ヶ谷の自宅で、家政研究所を開設した。洋裁、和裁、刺繍、料理など各分野の専門家を招き、20数名の生徒を指導し、それまでの狭い家事科からの脱却を図った。そして、2年後の大正14年3月、東京女高師を退職し、同年4月、日本女性のための高等教育拠点として、東京家政学院を開校するに至った。

実践的家政学を追究した東京家政専門学校開校

事前に購入した東京市麴町区三番町13番地の土地に、木造2階建校舎が完成し、1925（大正14）年4月、東京家政学院は、大江スミを校長として、家政高等師範部128名（修業3か年）、家政専修部84名（修業2か年）、家事実習部61名（修業1か年）、合計273名でスタートした。初年度においてこれだけの生徒が集まったことから、大江の名声が高かったことが伺える。家事・裁縫・割烹などの実習科目のほかに、倫理学、教育学、憲法・民法、統計学、社会学、家政学概論、物理・化学、生理・衛生学など多岐にわたる分野を総合的に学ぶ学科課程を実施した。

翌15年3月、家事実習部を廃止。同年4月、同所に鉄筋コンクリート4階建の校舎を新築。財団法人を組織し、大江が理事長を兼任した。1927（昭和2）年7月、家政高等師範部を「専門学校令」による東京家政専門学校に昇格させ、家政専修部を東京家政学院本科と改称して存続させ、大江が校長に就任した。専門学校第1回卒業生に対し、家事科教員の無試験検定免許状を取得させるた

め、文部省に懇請し、昭和3年2月、3年生が試験を受けた。そして同年3月、師範学校・中学校・高等女学校の家事科教員無試験検定が認可された。開校2年にして専門学校に昇格し、3年後第1回卒業生から無試験検定が適用されることになった。それは生徒の実力とともに、学科目・教員・設備・財政基盤などの条件が整っており、かつ、文部省が大江校長の教育方針を高く評価したからであろう。同年4月、東京家政専門学校に研究科（裁縫科・修業1か年）を、東京家政学院（各種学校）に専攻科（修業1か年）を設置した。

農園開設

1931（昭和6）年4月、東京府北多摩郡千歳村字船橋105番地（現東京都世田谷区船橋）に園芸実習場兼運動場として、828坪の土地を購入し、さらに隣接地2,000坪を借り入れ、念願の農園を開設した。当時女子の学校で農場を備えている学校は全くなかった。自然に対する感謝、労働の神聖なことを悟らせ、農民の労苦に対する感謝、土地への愛着心を養うことなどが目的であった。同年6月、木造瓦葺平屋建5棟が建築され、裁縫と割烹の分教場が開設された。ここで付近の子女の和裁、料理の教育にあたった。

校友会の中に園芸部ができて、6月末から作業が開始された。下級生が茶の実をまき、茄子の苗の植え付けを行った。夏季休暇中は、1人5日間ずつ数人1組になって農園作業を行った。修養鍛錬と園芸趣味の涵養である。農場に隣接したグラウンドではテニス、バレー、バスケットなどが行われた。

北側に櫟林^{くぬぎばやし}、東側の北農場には小さな温室と厩肥堆肥小屋^{きゅうひたいひ}、道を挟んだ南農場には事務所、農夫室、収納室（地下室あり）、器具室、生徒控室が並び、他に鶏舎、兎小屋、軟化室が備えられていた。農園作業として、花卉^{かき}・蔬菜^{そさい}の播種^{はしゅう}・育成、餅つき、白菜漬^{たくわん}け、甘酒作り、沢庵漬^{たくわん}け、茶摘みなどが行われた。

新校舎建設と高等女学校開校

実績が世間に認められ、生徒は全国から、また外地からも多くの志願者が集まるようになった。1935（昭和10）年、麴町の校地に地上6階、地下2階の本館が竣工された。当時の学校としては珍しく、エレベーター1基と暖房設備も整った、かなりモダンな建築であった。

大江は、中等教育と高等教育の一貫性の必要を感じて、1939（昭和14）年4月、麴町区九段3丁目19番地の8において、修業年限5年、定員500名の東京家政学院高等女学校を開校し、校長を務めた。「我が国が培ってきた婦徳に立って人格の育成を大事にし、実践、実習に重きを置く。国家社会に出て、将来家庭の主婦として能力の高い女子を養成する」（『東京家政学院100年史』215・216頁）ことを目的とした。初年度は募集人員の5倍の500名が願書を提出し、合格者112名を2学級に編成してスタートした。1943（昭和18）年には各学年がそろい10学級の学校に発展した。セーラーカラーでダブルの服に、水兵帽風の帽子、赤い裏のマントというモダンな制服を、大江は小学校を卒業したばかりの生徒自身の手で作らせた。

このように東京家政学院は発展期を迎えるのだが、時局は次第に戦争の影が忍び寄ってくる。戦時下の学院の様子を見てみよう。

戦時下に入って

1937（昭和12）年7月、日中戦争に突入し、非常時色が強まった。同年10月28日、習志野騎兵隊長の賀陽宮恒憲王^{かやのみやつおのりおう}が、部隊を引率して靖国神社参拝後、近接する学院に来校された。賀陽宮は講堂で生徒や職員に激励の言葉をかけられた。早朝のため、全校あげて兵隊に味噌汁の朝食を供した。

1938（昭和13）年4月、「国家総動員法」が公布された。

1939（昭和14）年9月、第二次世界大戦勃発。

1940（昭和15）年11月、学院は、創立15周年及び農園設立10周年を兼ねた感謝祭を行った。農園作業を通して、勤労の精神と共同の精神を体得させて

いた大江は、時局が容易ではないものと考えて、この秋から週2時間の軍事教練を正課として取り入れた。軍事的な基礎訓練によって、至誠尽忠の精神培養を根本として、心身一体の実践的鍛錬を行うことを目的とした。

軍事教練、報国団結成

生徒たち手製の戦闘帽を少し斜にかぶり、剣を腰に、木銃を背に、四谷まで行進する。時には猛訓練を重ねた。1941（昭和16）年7月、陸軍戸山学校の校庭にて賀陽宮殿下の閲兵を賜った。



軍事教練の様子（『東京家政学院五十年史』より）

1941（昭和16）年4月、国民学校発足。

文部省の指示に従い「校友会」を解散し、学校と生徒を一元とする「報国団」を結成。鍛錬部勤労奉仕班は、軍服の修理、陸軍病院での奉仕作業、靖国神社に月1回清掃用具を持参して境内を清掃し、戦勝祈願の参拝をした。出征家族の慰問、慰問文、慰問品の発送を月1回定期的に行った。

勤労奉仕

働き手を戦地に送った農村では共同炊事が行われるようになり、生徒は共同炊事、託児所の手伝いに出かけた。生徒たちの勤勉に対して村人からは、「学生様方は皆々御やさしく、明朗にて、何事も一致協力して村民の手となり足となり御働き下されるは、日頃学校における校長先生始め担任諸先生の御指導の賜によるものと存知居候」（『東京家政学院五十年史』80頁）などと、感謝の手紙が多数寄せられた。10年前に農園を開設し、労働作業を教育実践として取り入れてきた大江の教育理論が功を奏したといえよう。

また、戦地の労苦を思い、「克己弁当」として日の丸弁当の日を定めた。前年から砂糖やマッチが切符制になり、さらに米が配給制になった。次々と統制が加えられる不安の中で、学院農園では、勤労意欲の高揚を図って、生産から加工・貯蔵までの一貫作業の実習や作業の時間が多くなった。

そして1941（昭和16）年12月8日、太平洋戦争に突入する。

参考文献

『学制百年史』『学制百年史 資料編』文部省

『学制百二十年史』文部省

『東京家政学院五十年史』

『東京家政学院100年史』

神辺靖光・長本裕子『百花繚乱 日本の女学校』女子教育散策 大正・昭和
初期編、成文堂 2025年1月刊行

東京経済大学に父母の会が発足される

— 1983年4月に発足した大学父母の会 —

たにもと むねお
谷本 宗生(大東文化大学)

東京経済大学の『大学百二十年史』(資料編、2022年)をちょうど読んでいて、東京経済大学にも在学生らの保護者にあたる、父母の会が1983年4月に発足され、相応に活動していたことなどがよく分かった。以下に、東京経済大学父母の会の活動について、とても興味深いので少し紹介しておこう。

東京経済大学父母の会発足

「うちの子は元気に学生生活を送っているか知らん。」「単位はとれているんだろうか。」等々、学生諸君のご父母の心配の種は尽きない。殊に故郷をあとに東京で一人住まいをする我が子を持つ親にあってはなおさらのことである。

3月12日、父母の会設立発起人会が本学二〇一番研究集会室で行われた。出席者は発起人(父母)七人、大学から六人。名称を「東京経済大学父母の会」とした。

この父母の会は、在学中の父母の自主的運営により、大学と父母との連絡を密にすることを第一義とし、年一回各地方で開催する懇談会、会誌の発行などを通して、大学の現状、教育目標、教育内容等々を認識し、大学の運営について意見・提言を行ったり、また、教育への支援を行うことも考えている。将来は講演会、公開講座など地方との積極的な文化交流を考えており、かなり活発な会となりそうである。

(『東京経済大学報』第16巻第1号、1983年4月所収)

東京経済大学父母の会が学術・スポーツ奨励賞を制定 受賞者には奨励金を授与

東京経済大学父母の会が、昨年度より発足したのは周知のことと思うが、この程「学術、文化、スポーツの分野において優れた成果をあげた学生(個人および団体)を表彰し、その活動をいつそう奨励することを目的とする」父母の会の「学術・スポーツ奨励賞」が設けられた。その大綱は次のとおりである。

〈賞の種類〉個人賞と団体賞が設けられ、受賞者には奨励金が与えられる。

〈対象〉昭和59年2月1日から同60年1月31日までの一年間における学生の学術、文化、スポーツの分野における学内外の活動成果。

〈推薦資格〉学生の自薦、他薦のほか、教職員、父母、卒業生。

〈推薦の方法〉推薦の受付期間は昭和59年12月1日～同60年2月10日。推薦には①被推薦者(団体名)②推薦理由③推薦者署名、捺印を必要とする。所定の用紙は学生部事務室、第二事務室に用意してある。推薦の受付場所は、学生部事務室、第二部事務室。

〈審査〉賞の審査は、学生部の部長、副部長、事務室長、第二部事務室長、父母の会事務局長の計五名で構成される審査委員会において行い、同委員会の審査内容にもとづいて学生委員会が決定する。

〈発表〉賞の決定は昭和60年2月中に行い、3月上旬に公表する。

(『東京経済大学報』第17巻第5号、1984年12月所収)

新装「国分寺駅」と大学

大学のある国分寺市には、玄関口として、JR中央線と西武国分寺線、多摩湖線の乗り入れる国分寺駅がある。…[中略]…駅の改装に伴って中央線の特別快速が国分寺駅に停車することとなった。新宿駅までの所要時間が短縮され、わずか19分となった。国分寺市の都市化に拍車をかける、もう一つの要素ということが出来よう。

大学としてもこの都市化した国分寺市と大学とのつながりを強調するため、国分寺駅構内に一辺が5メートルを越す看板を設け、“国際社会に発展する大学”“若さと明るさのある大学”を示すデザインをほどこし、大学名を強調することとしている。同じデザインのものが上り線の三鷹駅、西荻窪駅、下り線の国立駅にも設置される。国分寺駅を中心とした数駅に看板を掲示することによって地域と大学とのつながりをより強烈にイメージづけようとするものである。

(『東京経済大学父母の会会報』第15号、1989年4月所収)

父母の会会報で、国分寺駅と大学とのつながりについて情宣していることは、東京経済大学が実際のキャンパス立地としてどういう存在であるか…などを、大学のステークホルダーである父母の会にもきちんと理解してもらおうと努めていたことがよく分かる。

進学案内書にみる戦前期東京の予備校(19):

『入学選定男女東京遊学案内と学校の評判』(大正7年)(3)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号では、前号に引き続き二松堂より刊行された太田秀隆『入学選定男女東京遊学案内と学校の評判』を見ていく。今号で「各種学校」の男子の部に掲載された予備校はすべてを紹介し終えるが、今号で取り上げるのは多くの紙幅が割かれている国民英学会のみである。

十一、国民英学会

所在、神田区錦町三丁目十九番地

目的、本校は専ら実用の英語と英方学^{ママ}を教授するを以て目的とす

備考、学科

学科を分つ事左の如し

一初等科(午前並夜学)(チヨイスリーダー第一より第三迄の程度^{ママ}にして始めて英語を学ぶ者のために設く)

一普通科(午前並夜学)(チヨイスリーダー第三、四巻の程度)

一受験科(午前午後並夜学^{ママ})(ユニオン第四リーダー又はチヨイス第五リーダー以上の程度^{ママ})

一高等受験科(午前並夜学)(「ブツシング」又は「ゼ、ユース、オブ、ライフ」の程度)

一英文学科(夜学)(スウキントン氏英文学の程度)

一会話専修科(夜学)(中学卒業^{ママ}以上の学力を要す)

入学者の学力^{ママ}程度

本会入学者は二箇年の高等小学校を卒業したる者若しくは之と同等以上の学力を有する者に限る

学費、入学の際束修として金一円を納むべし

各科授業料は左の如し

| 学期 | | 初等科 | 受験科 |
|-------|-------|--------|--------|
| 学科 | | 普通科 | |
| 春 四月 | 一時全納 | 金三円三拾銭 | 金三円六拾銭 |
| 期 五月 | 一ヶ月分納 | 金一円二拾銭 | 金一円三拾銭 |
| | 六月 | | |
| 秋 九月 | 一時全納 | 金三円三拾銭 | 金三円六拾銭 |
| 期 十月 | 一ヶ月分納 | 金一円二拾銭 | 金一円三拾銭 |
| | 十一月 | | |
| 冬 十二月 | 一時全納 | 金四円四拾銭 | 金四円八拾銭 |
| | 一月 | | |
| 期 二月 | 一ヶ月分納 | 金一円二拾銭 | 金一円三拾銭 |
| | 三月 | | |
| 学期 | | 高等受験科 | 会話専修科 |
| 学科 | | 英文学科 | |
| 春 四月 | 一時全納 | 金三円九拾銭 | 金四円二拾銭 |
| 期 五月 | 一ヶ月分納 | 金一円四拾銭 | 金一円五拾銭 |
| | 六月 | | |
| 秋 九月 | 一時全納 | 金三円九拾銭 | 金四円二拾銭 |
| 期 十月 | 一ヶ月分納 | 金一円四拾銭 | 金一円五拾銭 |
| | 十一月 | | |
| 冬 十二月 | 一時全納 | 金五円二拾銭 | 金五円六拾銭 |
| | 一月 | | |
| 期 二月 | 一ヶ月分納 | 金一円四拾銭 | 金一円五拾銭 |
| | 三月 | | |

午前の初等科普通科又は午前午後の受験科は午前高等受験科と夜学の各級と兼修の授業料は別に規程あり本校に就き照合すべし

職員、校長磯邊彌一郎氏にして文学士、石本音彦氏、石井源太郎氏外内外人十数名なり

【評】一体今の我が英語学界の一大欠点は文法に重きを置き過ぎる、文法が何だ文法があるがために言語文章が存在するのは断じてない、言語文章は想念の着物だ、思想の為に存在するのだ、文法の如きは苦しい思をしてやたらに暗記するとも読書して居れば不知不識の内に覚へて来るのである。見よ文法とイデオムとて書を読み得るものなりと思へる英学生を、やれエマーズンを読んで居るのハツクスレーを読んで居るのと人普な事を謂ふて居るがハツクスレーやエムーゾンの人生観は如何にと尋ねれば茫然として一言の答も出来ない、よし万卷の書を読破するも著者のスピリットを読む能はずんば読まざるに如かずだ。今の教育とはこんなものだ、先生様が物を教へる機械だから作つた生徒はヤハリ機械に過ぎん。敢へて謂ふ文法は必要だ、そは書を読み文を書くために書を読むのは精神を読まんために、文を書くは精神を告くるためだ、文法やイデオムは其末である、本会か此弊を免れて居るのは喜ぶ可き事だ。

末尾の評は、国民英学会の評価というよりは筆者の英語教育観が語られているようにも思えるが、この筆者は国民英学会を高く評価しているのだろう。以前に紹介した正則英語学校よりも詳細に紹介されている。

次号では、「中等学校」に掲載された予備校を見ていく。

七年制高等学校における尋常科・高等科間の教育の相違：
一学校空間での中等教育から高等教育への接続について

(1) 本研究の視座

ざるた れ お
猿田 怜央(早稲田大学教育学部)

1. はじめに

1918年、かつて8つの官立高等学校を設置した高等学校令にかわり、いわゆる「第二次高等学校令」が公布された。その第七条では高等学校の修業年限について、以下のように示されている。

第七条 高等学校ノ修業年限ハ七年トシ高等科三年尋常科四年トス
高等学校ハ高等科ノミヲ置クコトヲ得(1)

すなわち高等学校は尋常科4年を含む7年間の修業を基本としており、高等科3年のみを設置することはあくまで「可能」である、とされているのである。これは定員確保や学校制度の未完成を理由に、なし崩し的に予科と補充科を設けていった1886年の「中学校令」における高等中学校(2)とは対照的である。

七年制高等学校についての構想は、1917年臨時教育会議による答申のなかで明確にされた。その性格については、同答申で以下のように示されている。

高等学校ハ完全ナル高等普通教育ヲ授クル所ナルヲ以テ尋常科四年高等科三年合計修業年限七年ノ制ニ依リテ小学校卒業後一貫シタル教育ヲ授クルハ有数ナル教育法ナルカ故ニ此ノ制ニ依ル学校ノ設置ヲ認メタリ(3)

高等学校が高等普通教育完成を担うとすることにあたり、七年制高等学校は「有

用ナル教育法」である「小学校卒業後一貫シタル教育」を行う教育機関であるとされている。したがって七年制高等学校は「第二次高等学校令」が基本理念とした高等普通教育の完成に対する臨時教育会の回答として見ることができるが、実施の顛末は財源、利便性の問題から公私立に設置を一任し、その普及には至らなかった(4)。

七年制高等学校は修業年限4年の尋常科と3年間の高等科を有し、尋常科生徒は原則として無試験で高等科へエスカレーター式に進級することになっている。1919年の「高等学校規程」第三条によると尋常科については、以下のように示される。

中学校ノ学科目ノ程度ニ関スル中学校令施行規則ノ規定ハ尋常科ニ関シ
之ヲ準用ス(5)

科目編成については、高等学校尋常科は中学校に準ずるとされている。そのほか競技大会は中学校級に参加するなど、尋常科は中学校と同等のものと認識されていたとかがえる。その一方で、尋常科はあくまで高等学校の内部に存在し、「高等学校ノ修業年限ハ七年トシ」とあるように高等教育との接続を前提とする、一般の中学校とは異なる教育機関として位置づけられていたと見える。

すなわち七年制高等学校は、その基本的性格については中学校のそれに準じながらも高等教育へ直結されていた尋常科と、三年制高等学校である高等科が共存する異質な空間であつたといえる。

このように七年制高等学校は、中等教育と高等教育を一学校空間において連結させるという特徴的な性格を有していた。本研究ではそのような七年制高等学校の側面に注目し、旧制高等学校史のひとつとして検討を行う。

2. 本研究の視座:なぜ「七年制高等学校」に着目するのか

ではここで本研究はなぜ、七年制高等学校に着目するのかについて示したい。

まず先述したように七年制高等学校はその根拠となる法令から、七年の修業を基本とする、いわば中高一貫校であるといえよう。しかし今日における中高一貫校はその一部が「中等教育学校」と定義されるように中等教育を取り扱う教育機関であるのに対し、七年制高等学校は中等教育を実施する尋常科と高等教育を実施する高等科の連結を図る教育機関である。この点において七年制高等学校は学制下において類を見ない特異な構造を有する教育機関であったといえる。

法令で7年間の修業期間を設けられた高等学校であったが、実際に七年制高等学校が設置されたのは3年後の1921年であるばかりか、高等科のみを置く三年制高等学校が主流となり設置校の大半を占めるに至った。七年制高等学校の設置がこのような状況に終始した理由は様々であるが、ここで課題としたいのは辛うじて設置された七年制高等学校において、尋常科と高等科との連結を実現するうえでどのような教育方針がとられ、実践が行われたのかという点である。

当初7年間の修業を基本とした高等学校について、大学予科としての高等科に加えさらにその予科といえる尋常科を設けることで大学期を含めた10年間にもおよぶ教育の展開がどのように企図されていたのか、そして隔たりを持つ中等教育と高等教育とを接続させる高等学校がどのように位置づけられていたのかを明らかにすることは、大正期の高等学校に求められた性格について考察するうえで見逃すことはできないだろう。

ところで七年制高等学校についての評価は、その多くが高等学校として認められる性格を欠く富裕層向けの受験校であった(6)というものであり、市川昭午氏も「高校が実質的に大学予科として機能するようになった結果、高等普通教育を施す中等教育機関としての意味を失った(7)」と評しているように、高等学校令の理念の挫折であり機能不全に陥った失敗例であるというものに終始している。

しかしながら七年制高等学校は、たとえば県立富山高等学校が地主馬場家

の思慮にもとづいて設置された(8)ように、自治体ないし設置者が持つ教育観が色濃く反映される現場であったと見ることができる。高等学校長会議への着目(9)など経営主体の思想を探る研究が散見される今日において、教育思想史としての七年制高等学校の再評価は重要なアプローチとなるのではないだろうか。

先述したように七年制高等学校の校風・文化については、しばしば従来の「旧制高校的なるもの」を欠いていたという評価が下される。しかしひとつの学校空間に尋常科と高等科という、異なる二つの教育段階を内包する七年制高等学校における文化の様相を無視して単なる三年制高等学校の劣化版と見なすのは早計であると言わざるを得ない。二つの科を擁したことでその「系統的指導」が複雑化した七年制高等学校の校内文化は、「服装や規律の相違とか、対抗試合や記念祭、文化部参加に対する尋常科生の“差別待遇”となってあらわれ(10)」たとされる。七年制高等学校の持つ輻輳性を踏まえ、その校風・文化史の再評価として改めて検討を行うという点でも、着目の意義はあるといえよう。

また七年制高等学校への着目は、天皇制公教育における中等教育と高等教育の接続に付随する「顕教・密教」の問題を問い直す契機にもなり得ると考える。

天皇制公教育における「顕教・密教」とは、広く中等教育以下においては天皇制イデオロギーを色濃く反映した解釈を教え込む「顕教」と高等教育においてそれらを建前とみなした科学的解釈を授ける「密教」とが、天皇制公教育に内包されていたとする見方である(11)。この「顕教・密教」は、高等学校と帝国大学において中等教育やほか教育機関とは隔絶された「申し合わせ」が共有されていたと見るものであり、天皇制公教育における高等教育の特権性と閉鎖性を指摘するものである。

一般に「密教」を体験できる者を高等学校進学者と見た場合、それは中学校卒業生のなかでも少数の存在である。中学校を卒業して高等学校の「密教」を体験するルートを一般型とすると、そこでは「密教」を享受し得る者が受験競争や文化資本の有無によって、天皇制公教育の「密教」の面に適応すると認めら

れるプロセスが求められる。すなわち中学校と高等学校との間には「顕教・密教」を隔てる自然淘汰のシステムが必要なのである。その一方で七年制高等学校は、エスカレーター式の進級制度であるため尋常科と高等科との間に自然淘汰のシステムを設けない。

こうした進級制度において、七年制高等学校は中等教育と高等教育との隔絶をどのように消化しようと試みていたのか。天皇制公教育の下で隔絶された教育段階を横断する七年制高等学校の教育方針と実践への注目は、高等学校のもつ特権性を指摘する「顕教・密教」論の再検討になり得るのではないだろうか。

3. おわりに

総括すると、「天皇制公教育において中等教育と高等教育をじかに接続する試みの事例」として七年制高等学校をとり上げ、二つの科を横断する教育方針と実践、校内の実情をふまえながら大正期以降の高等学校が持つ性格の一側面について検討を行うことが、本研究の視座となる。

またそれに伴い、「旧制高校的なるもの」を欠いた失敗例として捨象される七年制高等学校の内実を、先に述べた視点から改めて描出する契機となることを期待したい。

以上、今回は本研究を行うにあたっての全体的な視座と課題を示した。次回からは学校ごとの事例をふまえながら、完結した学校空間で中等教育と高等教育とを連結する試みとしての七年制高等学校について検討を行っていきたい。

なお本研究でとりあげる事例については、経営主体が特殊である私立高等学校は別の機会に回し、官公立高等学校を主とする予定である。

註

- (1) 米田俊彦編『近代日本教育関係法令体系』港の人、2009年、487頁。
- (2) 高橋佐門『旧制高等学校全史』時潮社、1986年、73頁。
- (3) 旧制高等学校資料保存会編『旧制高等学校全書』旧制高等学校資料保

存会刊行部、第3巻、1985年、58頁。

(4) 高橋佐門、前掲、675-676頁。

(5) 米田俊彦、前掲、500頁。

(6) 市川昭午『エリートの育成と教養教育：旧制高校への挽歌』東信堂、2020年、187頁。

(7) 同上、188頁。

(8) 富山大学年史編纂委員会編『富山大学五十年史』富山大学、上巻、2002年、179-180頁。

(9) たとえば、小暮克也・山鹿貴史・古壕典洋「旧制高等学校の教育政策決定過程に関する研究—校長と校長会に着目して—」『桜美林大学研究紀要 総合人間科学研究』桜美林大学、第3号、2023年など。

(10) 東京高等学校史刊行委員会編『東京高等学校史』東京高等学校同窓会、1970年、91頁。

(11) 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想—その五つの渦—』岩波新書、1956年、132頁。

資料から見る「教育」の歴史⑧

－「学の独立の為に昇格反対の叫び 早大学生の示威運動」

『東京日日新聞』（1919（大正8）年12月12日）－

やまもと たけし

山本 剛（有明教育芸術短期大学）

前号（130号）では、1919（大正8）年12月9日の『読売新聞』に掲載された記事である慶應義塾の学生が、大学「昇格」に対して反対する様子を紹介した。

本号では、これと同じく早稲田の学生も大学「昇格」に反対する様子を伝える記事を紹介する。早稲田は、1919（大正8）年9月10日付で「大学設立に関する認可申請書」を文部省に提出し、慶應義塾と同じ翌年2月5日付で認可される。すなわち、早稲田の場合もすでに認可申請書を提出し、大学が認可される直前の時期の反対の様子である。

1919（大正8）年12月12日の『大阪毎日新聞』では、「新学令に反対 早稲田も慶應に呼応して昇格反対運動」と題した記事が掲載された。

同紙の東京版『東京日日新聞』では、「学の独立の為に昇格反対の叫び

早大学生の示威運動」と題して、早稲田の学生が「学門（ママ）の独立を力説し」して、「既に新学令に拠つて決定せる来年度よりの昇格に対して」、「反対運動の烽火を揚げ始めた」と報じた。

同紙には、同年12月11日に学生大会が開かれ、早稲田大学の運動場に約300人の学生が集まり、「早稲田大学新学令反対」と記した大旗を始め、各自



「昇格の要はないと 昨日早大校庭にて学生平野君の演説」

応援旗を手にして、学生たちが校歌を高唱しつつ隊伍をなして「示威運動」を行ったことを記している。

「早大本科生」の「平野坪田以下数名」の学生は、「校内大隈総長銅像前に繰込み同校の創立者小野梓氏の肖像額を安置し」て、「昇格の要はない」と主張し、以下のように訴えた。

小野先生の意志と早稲田三十余年の歴史の為に徒に形式のみに趨らず 内容の充実を以て飽迄学門(ママ)の独立を尊重すべし

こうした言葉だけでは、慶應義塾の「大学昇格」に対する一部の学生の反対意見である「福澤先生の遺志」や「一種独特の慶應義塾なるもの」と同じように、具体的になにを意味するものなのか明確にはわからない。しかし、彼らは早稲田の創立者小野梓の肖像を前に、学問の独立を叫び、官立大学と同等の大学として認可される代償として、早稲田が国家によって統制・介入されることに反対したといつてよいであろう。

続けて、同紙には、「最近同校教授会に於て一二の少壮教授が新学令反対を主張した」と、記しており、教員のなかにも大学「昇格」に反対する者がいたことを伝えている。ただし、「昇格は既定の事実ゆえ大勢動かし難かるべく一部の学生には全体の意志に非ずとて冷淡な態度を執つているものもある」と結ばれており、大学「昇格」はすでに決定されるものであった。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項 (2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらゐを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

このたび、解剖学者・小金井良精(1858~1944年)の日記(原本:小金井家、複製:東京大学文書館)の『明治篇』(復刻:クレス出版、2016年)を手にして、1882~1885年の部分を急ぎ読んでみました。小金井は、1880年から官費留学生としてドイツに留学して、ベルリン大学などで解剖学全般を学び、1885年に帰朝し、東京大学医学部で系統解剖学を担当することになります。翌年には、帝国大学医科大学教授を拝命しました。

とくに、小金井が留学中、シュトラスブルク大学やベルリン大学の医学部で解剖学教授を務めたワルダイエルに彼の真摯な姿勢が認められ、ワルダイエルの助教として活動しました。彼の日記のなかで、1883年10月10日、ワルダイエル先生と会った小金井は、助教の位置を授かることを約束されます。同年10月31日には、年俸千マルクほどの口達もありました。同年10月よりベルリン大学に転任したワルダイエルとともに、小金井もベルリン大学の公認助手(月俸独貨200マルク)として働くことになります。日記には、「解剖所出勤申付かる 日々解剖所に在て師教ワルダイエル先生の教授を助け生徒の実地解剖を導く等の事を任務とす」と、実際に記されています。

このように、留学中にワルダイエルに師事した小金井は、後にワルダイエルの遺族から蔵書2千点の扱いについて相談を受けて東京大学で購入し、現在、医学図書館の特殊コレクション「ワルダイエル文庫」として所蔵公開しています。(谷本)

最近、中・小規模の書店に入ると「がんばって本屋続けてください」というエールを送りたくなる。そこでなんとなく1冊買ってしまおう。高山羽根子『首里の馬』(新潮文庫、2022年)も、そうした1冊で、あまり期待せずに読んだら(芥川賞受賞作であることも知らなかった)、アーキビストを主人公とした小説だった。アーキビストを主人公とする小説が他にあるのだろうか? 私にはとても珍しく感じた。新潮社のサイトに掲載されているあらすじは、次のようなもので、一見脈絡がない。「問読者(トイヨミ)——それが未名子の仕事だ。沖縄の古びた郷土資料館で資料整理を手伝う傍ら、世界の果ての孤独な業務従事者に向けてオンラインで問題を読み上げる。未名子は、この仕事が好きだった。台風の夜に、迷い込んだ宮古馬(ナークー)。ひとりきりの宇宙ステーション、極地の深海、紛争地のシェルター……孤独な人々の記憶と、この島の記録が、クイズを通してつながってゆく。絶賛を浴びた芥川賞受賞作」。しかし、記録を整理し、保存し、誰か共有することで、ばらばらに見える要素がつながり、これまで会ったことのない、遠く離れた人にもつながる。そんなことが起きる可能性がこの物語の中で示されていて、これまで読んだことのないような小説だと感じた。教育史やアーカイブズに関心のある人には、愛読書が1冊増えるかもしれない。(富岡)



また原稿の投稿がストップしており、コラムのみの投稿となりました。コラムは前々から気になっていた話で書きました。最近、大日本帝国陸・海軍の職業軍人を主人公ないし主要人物で描く漫画などをよく目にします(戦史ものではなく、日常(恋愛)ものとして)。旧制高校生もたまに見ます。しかし、師範学校は珍しく、かつ名称のみ使われているので気になって調べてみたものです。結局「よくわからない」という結論でしたが。「悪ふざけ」のようなコラムの中に名前を登場させられてしまった方々にはこちらの欄でお詫び申し上げます。

(長谷川)

ChatGPT等の生成 AI ツールに、「〇〇の論文を書いて下さい」と入力すると、「了解しました」と言って、書いてくれる。なるほど、学生はこれを利用しているのか。よく読むと、けっこう間違いはあるんだけど…。生成 AI ツールは、たしかに便利だし、使うことに否定しないけど、何のために大学に行っているのか、と言いたくなる。(山本剛)

山本先生のご紹介と富岡先生のご厚意を賜り、本号から同人として参加させていただきます。教育史について勉強中です。未熟な点が多々ありますが、これから何とぞよろしくお願いたします。(猿田)

先日、とある学会大会で久しぶりに、朝から若い筑波や早稲田の院生諸氏の研究発表を拝聴しました。若者としての清々しい直向きさを感じ、好感がもてました。たしかにまだ至らぬ点が研究上あることは否めませんが、それはこれからの伸びしろ・・として、とても前向きに感じられました。またある発表会場での司会役のかたについても、ジェントルマン風の丁寧な応対を終始心がけていて、素晴らしいことだと感心しました。ちょうど懇親会で話をうかがったところ、今回が初めての司会役であったということで、ついその初体験の真摯な気持ちを、これからもうずっと忘れないでください!とか語ってしまいました。

大会の公開シンポも評価と測定を問うテーマで、まさに古くて新しい、教育学上の現代的なテーマだと実感しました。会場のフロア末席に参加していた私も、後日、その公開シンポの内容について、私が担当している授業受講の院生さんにもかくかくしかじかと説明し、学会情報の共有を相応にはかりました。若い院生がまた修論や博論などで、よりテーマの探究を深めていただけたらなんともうれしいですね。(谷本)

神辺先生を訪ねて(2)

小春日和の 11 月下旬、再び神辺先生が入所されている高齢者施設を訪ねました。先生はにこにこして「やあ、よく来てくれましたね」と、迎えてくださいました。

先生は、戦後間もないころの、ご自分が見聞きした教育学界の裏話を書こうかと考えているとおっしゃいます。「私はね、やっぱり書くことが一番楽しいし、書いてないとだめなんです。ぼうっとベッドに横たわっているだけではだめになってしまう」と。しかし、年月などを確かめたくても、メモした資料が手元になくなかなか実行できないでいられます。書きたいことはたくさんあり、原稿用紙も鉛筆もたくさん持ってこられています。落ち着いたら、本や資料を取りに行くつもりで、とりあえず、衣類などの生活に必要なものだけを持って入所されたのでした。

それでも先生は、夕食にお酒 1 合の晩酌を嗜んだり、朝食に牛乳を要望されたりしてご自分なりのスタイルを徐々に実現して、施設での生活になじんでおられる様子でした。お元気そうで、滔々とお話されるので安心ですが、1 日も早くご執筆ができる環境が整うようにと願いつつ施設を後にしました。

そして、11 月 30 日、中学校形成史研究の総括として、『明治前期 中学校形成史 総括編』を成文堂より上梓されました。まだご自宅にいらっしゃって校正のお手伝いをしている時、「この本が完成したら、抱いて寝たいけど」などとおっしゃっていましたが、今ごろは御本をじっくり眺めておられることでしょう。(長本)



山本剛さんからのご紹介で、早稲田大学の猿田さんが同人に参加してくださいました。まだ学部生だそうです。これからのご研究の進展が大変楽しみです。

11月15日に近畿大学を会場校に関西教育学会第77回大会が開催されました。「大会実行委員長」なんていうものがまわってきたので、一人で仕事をかかえこまず、多くの人といっしょにやるしかないと思い、近大の同僚・学生のみなさん、関西を中心とした研究仲間に助けを求めて準備にあたりました。その結果、無事、盛会のうちに終えることができました。みなさんに色々な仕事をやっていていただいて、私自身はかなりラクをしていたつ

もりでしたが、終わってから数週間、後遺症のようなものが続き、授業以外には、メールを含めてほとんど執筆が進まない状態になっていました。数日前からは、かなり体調がもどってきたのを感じていますが、本号も連載原稿が間に合わず大変残念です。スランプからの脱出は何か少しでも話したり書いたりしてみることが秘訣だろうと想像します。ゆるゆると動いていきたいと思います。

そこでお知らせしたいことがあります。12月28日に千葉県浦安市で「学びの共同体」を提唱している教育学者・佐藤学さんを迎えた公開イベント(研究会)が開催されます。これを準備しているのは「井戸端ラジオ～世代間ネットワーク」(12月28日に正式発足予定)という数名の個人でつくっているグループで、私もメンバーの一人です。さらに、パネルディスカッションにも参加することにしました(佐藤学さんの研究を読んで、何かお尋ねしてみようと思います)。

「井戸端ラジオ～世代間ネットワーク」(12月28日に正式発足予定)では、世代間をつなぐさまざまなイベント開催やイベントを記録した動画の無料公開などをやっていく予定です。今回のイベントはその最初の取り組みになります。

もしご興味がありましたら、年末の12月28日夕方から夜のイベント、ぜひお申し込みください(広めの会場なのでだいじょうぶとは思いますが、早めのお申し込みが助かります)。詳細は次頁のチラシをご覧ください。

もう一つは、私が40年ほど前に寮生としてお世話になり、そして現在は元寮生としてつながりのある京大吉田寮の関係で、12月19日に京都大学でシンポジウムがあります。対面とオンラインのどちらでも参加できます。大学の自治のこれからを考える上でもヒントが得られそうな内容です。期日が近づいていますが、もしご都合がつかましたらぜひ。次々ページにチラシを貼りました。貼ってばかりで恐縮です。(富岡)

後援：浦安市教育委員会・千葉県教育委員会

浦安の教育、みんなで考えよう

日本全国3000校以上で実践される「学びの共同体」の提唱者
教室に入り、子どもと教師に寄り添い続けて30年以上

佐藤学さんを迎えて なんでも尋ねてみよう♪

市民活動と教育 × 学びの共同体

市民活動と教育って関係あるの？

「学びの共同体」って、どういうもの？

こどもの世界で、「学校」は時間的にも大きな比重を占めています。
その中でも、授業はとても大事な要素です。

授業づくりや先生方の授業支援に長年取り組んで来られ、日本全国津々浦々、
また中国や韓国などの学校にも出向いて、多くの子どもや教師と出会ってきた
佐藤学氏を迎えて、地域も巻き込んだ「学びの共同体」の可能性について
話し合いたいと思います。



東京大学名誉教授
全米教育アカデミー会員
佐藤学氏

Profile

東京教育大学教育学部教育学科卒業
東京大学大学院教育学研究科修士
放送大学、ハーバード大学、
ニューヨーク大学客員教授、
ベルリン自由大学招聘教授等を歴任

プログラム

第1部 18:45~19:35

基調講演「市民活動と教育 学びの共同体構想」

佐藤学氏

第2部 19:35~20:40

パネルディスカッション

「佐藤学さんにこれだけは聞きたい」

司会



古山明男氏
おたるネット代表



山口祥子氏
小学校校長



関口桃子氏
高校1年生



佐原光氏
フリースクール・
学習塾代表



富岡勝氏
近畿大学教授



宮島衣瑛氏
広島大学大学院
特命助教

第3部 20:50~21:27

みんなで語ろう♪ 参加者グループトーク&意見シェア

日時 **12/28 (日) 18:45~21:30** (開場18:30)

会場 **J:COM浦安音楽ホール内**
ハーモニーホール(4階) (JR新浦安駅南口から徒歩1分)
千葉県浦安市入船一丁目6番1号

参加費 995円

問合せ **090-9678-7230 (山田)**
jenaplan.urayasu@gmail.com

申込はこちら



会場地図



主催: こんな学校にしたい会 共催: 井戸端ラジオ~世代間ダイアログ~

和解成立とその先へ 吉田寮の今後と大学自治の未来

Beyond the Settlement: The Future of Yoshida Dormitory and University Autonomy

長年にわたる吉田寮裁判は今年8月25日に和解を迎えました。これを機に、これまでの裁判の経緯や今後の展望、署名、吉田寮の補修などについて、弁護士や大学教員を交えて考えます。

▶ 12月19日（金）18：45開場、19：00開会

▶ 会場：京大文学部第3講義室

▶ ZOOM 同時配信あり

事前申込必要（下記 QR または公式サイトより）

ZOOM 視聴のみ

登壇者（予定）：

- ・ 現役吉田寮生
- ・ 吉田寮被告団 元代理人弁護士
- ・ 高山佳奈子 教授（法）
- ・ 酒井朋子 准教授（人文研）
- ・ 中尾芳治 氏
（考古学者、元帝塚山学院大学教授）

< 関連団体アピール >

京都大学中東問題有志学習会
杉江あい 准教授（文）

お申し込み→

<https://forms.gle/wHs3QoBNLEkYHWez8>



✓ 入場無料・カンパ制

✓ 集会終了後吉田寮食堂
にて交流会を実施

お問い合わせ: yoshidaryokohoshitsu@gmail.com

吉田寮公式サイト: <https://yoshidaryo.org/>